

“But Masters, Remember That I Am an Ass”

— *Much Ado about Nothing* における邪視と中傷 —

滝 川 睦

I

Much Ado about Nothing (1598? 以下 *Ado*) 四幕二場。Borachio と Conrade の取り調べを終えた Dogberry が、息巻いて次の台詞を口にする——

Dost thou [Conrade] not
suspect my years? O that he [the Sexton] were here to write me
down an ass! But masters, remember that I am an
ass: though it be not written down, yet forget not
that I am an ass. (4.2.71-75)¹⁾

“suspect” の誤用という malapropism もさることながら、Conrade の “you are an ass” (70) という罵詈に腹を立てて Dogberry が連呼する言葉 “I am an ass” はとりわけ強くわれわれの印象に残る。Conrade たちの罪状に、自分への侮辱をも加えてしかるべきだ、と Dogberry が憤っているにもかかわらず、愚者であることを愚者自身がさも誇らしげに喧伝しているような印象を与えてしまうからである。だが、われわれがこの台詞に惹き付けられるのは、ただ単に Dogberry の愚かな言葉遣いが魅力的だからであろうか。Elliot Krieger は、*Ado* における特権階級の指標は、「楽屋落ち」(in-joke) や「両義的な言葉」(double-entendre) を自家葉籠中の物にしていることであり、その規範から逸脱し、奇抜な言い回しを無理に用いて、けっきょく上流階級の言葉を使いこなせない Dogberry も、“I thank you: I am not of many words, but I / thank you” (1.1.146-47) とそっけない返事をする Don John も、Messina の貴族社会から排除されており、どちらも狂言回しの役を演じているにすぎないと指摘する (55, 61)。直感に依拠し、「言語のほとんど外側に位置している」Dogberry と Verges には、「現実的な社会的権力」はまったく与えられないと声明する Jean E. Howard も、道化を貴族社会から排除された存在とみなす点では、Krieger と同じ批評的立場に立っているといってもいいだろう (Howard 177)。

なるほど、言葉数の少ない Don John にしても、気取った言葉を使うつもりで malapropism を連発する Dogberry にしても、言説の力で社会を成り立たせている貴族社会から排除され、その周縁に位置していることは間違いない。しかし劇の結末において、その身柄が拘束され共同

体に連れ戻されることが告げられる Don John も、Messina にいつまでもとどまり続ける Dogberry も、あくまでも貴族社会の周縁に身を置きつつも、そこから「現実的な社会的権力」とは異なる、彼らの言葉に込められた呪術的な力を支配階級に及ぼしているのではないか。

本稿の目的は、冒頭に掲げた Dogberry の台詞、とくに “But masters, remember that I am an / ass” という言葉を、近代初期英国における邪視信仰 (the evil eye belief) と中傷 (slander, defamation) の概念の関連性に焦点を合わせて、人類学的・歴史学的視座から分析することである。

II

邪視 (the evil eye) とは、特定の人物や動物、あるいは穀物に危害を加える力を持った眼や眼差しを意味する。邪視の持ち主は、標的となる対象に、身体部位の損傷や病気、極端な場合には死をもたらす。意図的によこしまな眼差しが投げられる場合もあれば、知らず知らずのうちに投げかけている場合もある。赤ん坊、子供、女性がそのターゲットとされやすい。とりわけ、対象となる者が、幸運、健康、美貌に恵まれている場合は、邪視の犠牲となりやすい。ときには賞賛の言葉が邪悪な視線を招いたり、そうした言葉そのものが邪視にとってかわることもある。こうした邪視信仰は、地中海沿岸地方、中近東、南アジアを中心に、ヨーロッパから北アフリカ、東アフリカ、中米にいたる幅広い地域にみられる、古代ギリシア・ローマ時代から現代まで続くものである (Dundes 258-59; Siebers x; Woodbridge 23)。

Linda Woodbridge は、James I の *Daemonologie* (1597) の一節—— “such kinde of Charmes as commonlie dafte wiues vses, for healing of forspoken goodes, for preseruing them from euill eyes” (11-12) ——や聖書における邪視への言及 (Prov. 23: 6-8; Deut. 28:54-56; Matt. 20: 15) を例に挙げて、近代初期英国においても邪視信仰は無縁のものではなかったことを指摘する (23)。彼女はさらに、Petrarch の恋愛詩、Shakespeare の *Lucrece* (1594)、*Othello* (1602?)、*Cymbeline* (1609-10) などを分析の俎上に載せ、両詩人が邪視の概念を知悉していたことを検証している。Desdemona の台詞 “And yet I fear you [Othello], for you're fatal then / When your eyes roll so” (5.2.37-38) に表現される、Iago の邪視に感染した Othello の眼差し、そして次のように描かれる Tarquin の “greedy eyeballs” は、Woodbridge によれば、典型的な邪視と呼ぶことができる (60-66)。

Into the chamber wickedly he stalks,
And gazeth on her yet unstained bed.
The curtains being close, about he walks,
Rolling his greedy eyeballs in his head; (*Lucrece* 365-68)

では、Woodbridge の論の中では邪視の概念と結びつけられることのない *Ado* の場合はどう

であろうか。

LEONATO. Which is the villain? Let me see his eyes,

That when I note another man like him

I may avoid him. Which of these is he?

BORACHIO. If you would know your wronger, look on me.

LEONATO. Art thou the slave that with thy breath hast kill'd

Mine innocent child? (5.1.253-58)

上に挙げた Leonato の台詞は、見つめられた者、息を吹きかけられた者に死をもたらすとされた、蛇の胴体と雄鶏の頭をもつ伝説上の怪物バシリスク (basilisk) ——別名コカトリス (cockatrice) ——を念頭に置いて語られている。つまり、Hero を中傷し、死 (擬装された死) に至らしめた張本人を、邪視を具えたバシリスクとして、Leonato は弾劾しているのである。その意味において、Hero に致命的な打撃を与える Borachio は、次の台詞に表された、同じくバシリスクのような眼差しを持つ Richard, Duke of Gloucester の眷属であると言うことができよう。

DUCHESS OF YORK. O my accursed womb, the bed of death!

A cockatrice hast thou hatch'd to the world

Whose unavoided eye is murderous. (*King Richard III* 4.1.53-55)

Plutarch は *The Philosophie, Commonlie Called, the Morals* (英訳 1603) の “Of Those Who Are Said to Bewitch with Their Eie”. と題された邪視論の中で、邪視の持ち主を “eie-biters” (722) と呼んでいるが、古来から邪視信仰が深く浸透していた地中海沿岸地方を舞台にした本劇において、“biting error” (4.1.169) と称される中傷は、Plutarch が語る意味での変奏された邪視なのである。

ただし上に引用した Leonato と Borachio のやりとりは、Borachio だけが *Ado* における邪視の持ち主であることを意味していない。「ヴァンパイアの犠牲者がヴァンパイアになるように、邪視は感染していく」(Woodbridge 66) という原理にしたがうならば、Don John はもちろんのこと、Borachio や Don John の邪視の犠牲者でありながら、共同体構成員の面前で Hero を中傷する Claudio も、その呪術的な力に感染していると言えよう。Francis Bacon は *The Essayes or Counsels, Civill and Morall* (1625) に収められた “Of Envy” の中で、“Envy” が聖書において “An Evill Eye” と呼ばれていること、さらに嫉妬の働きには、視線の「放射」 (“an Ejaculation”) もしくは「放出」 (“Irradiation”) があると認められてきたことを指摘したあとで、嫉妬深い人間の類型を列挙してみせる (27-28) ——

Deformed Persons, and Eunuches, and Old Men, and Bastards, are *Envious*:
For he that cannot possibly mend his owne case, will doe what he can to
impaire anothers. . . (28)

この一節に挙げられた人びとは、自分の置かれた状態を改善できないがゆえに、他人の状態を損なおうとして嫉妬深くなるというわけであるが、本劇中で “And one Deformed is one of them” (3.3.163) という夜警の「呼びかけ」(interpellation) とともに捕縛される Borachio たちにしても、“the bastard” (4.1.188, 5.1.187) と呼ばれる Don John ——彼は Claudio に対して、“that young start-up hath / all the glory of my overthrow” (1.3.62-63) と嫉妬をあらわにしている——にしても、邪視を放射する人物として Bacon が列挙する類型に合致しているのは興味深い。加えて、Bacon は嫉妬を「歩きまわる情念」(“a Gadding Passion” 28) と定義づけているが、文字通り夜出歩いているところを逮捕される Borachio も、Messina からの逃亡を企てる Don John も、「歩きまわる情念」が具現化された存在とみなすことさえ可能である。

ここでとくに注意しておきたいのは、じゅうらい嫉妬深い、よこしまな眼差しだけが邪視と呼ばれてきたのではなく、人を傷つけ、時には死に至らしめる中傷も、邪視の変奏とみなされてきたという点である。Plutarch が先に挙げた邪視論の中で、黒海の沿岸に住んでいた「ティバイス人」(“Thybiens”) は、眼だけでなく息や言葉によっても赤ん坊のみならず成人をも殺すことができることと語っていること、Geoffrey Whitney の *A Choice of Emblemes and Other Devises* (1586) における “*Inuidiae descriptio*” と題されたエンブレムでは、嫉妬の擬人化である老婆——彼女は悪意を表す蛇を食べ、胸から心臓をむしりとっている——が、中傷を意味する棘を、舌にも彼女のアトリビュートである杖にもはやしている (“her tonge, with stinges doth swell. / ... her staffe with prickes aboundes”) と説明されていることから、近代初期英国において、中傷が邪視のヴァージョンであると認められていたことは間違いない (Plutarch 723; Whitney 94)。

しかし本劇において中傷が邪視の役割を担っているとすれば、Claudio をはじめとして、彼の周囲の人物たちが Hero に対する中傷に加わるという事態は、先ほど挙げた邪視の感染の原理だけでは説明がつかなくなる。なぜならば、「うわさ」(“hearsay” 3.1.23) や「世評」(“report” 3.1.97) から成り立っていると言っても言い過ぎではない本劇では、²⁾ Don John や Borachio が邪視を放射するのは別の次元で、「うわさ」や「世評」に根を下ろした中傷の萌芽が、すでに常に随所に頭を覗かせているのであるから。

BEATRICE. That I was disdainful, and that I had my good wit
out of the ‘Hundred Merry Tales’—well, this was
Signior Benedick that said so.

.....
Why, he is the Prince’s jester, a very dull fool;
only his gift is in devising impossible slanders. (2.1.119-21, 127-28)

BALTHASAR. O good my lord, tax not so bad a voice
To slander music any more than once. (2.3.44-45)

HERO. And truly I'll devise some honest slanders
To stain my cousin with: one doth not know
How much an ill word may empoison liking. (3.1.84-86)

上に挙げた最初の引用は、舞踏会の場で仮面をかぶった Benedick に投げつけられる台詞。Benedick の「中傷」("slanders") に憤った Beatrice が、お返しに "the Prince's jester" と嘲りの言葉を彼に浴びせる。二番目の引用と同様に、祝宴、余興の場面にすら中傷の概念は忍び込んでいるのである。三番目の引用は、あずまの陰に隠れた Beatrice に聞かせる目的で語られる台詞である。84 行目の "slanders" にしても、86 行目の "How much an ill word may empoison liking" にしても、Hero 自身に降りかかる運命を暗示している。

こうした「うわさ」、「世評」そして中傷の萌芽を劇中で生成しているのは、Claudio の台詞—— "Benedick, didst thou note the daughter of Signior / Leonato?" (1.1.150-51)——で表現されているような、「眼差しを向ける」("note") 行為である。それは、「note」をめぐる地口を前景化させた、次のやりとりからも明白であろう。

DON PEDRO. Nay pray thee, come,
Or if thou wilt hold longer argument,
Do it in notes.

BALTHASAR. Note this before my notes;
There's not a note of mine that's worth the noting.

DON PEDRO. Why, these are very crotchets that he speaks!
Note notes, forsooth, and nothing! (2.3.52-57)

そして本劇では、この「眼差しを向ける」行為が、「note」に関して、*OED* (v.², 7.a, 7.b) で定義される行為——「汚名あるいはなんらかの過失についての非難を与えること」、「恥辱または欠点で有徴化したり、特徴づけること」——へと、邪視信仰が描くパラダイムにそって変貌していく危険性が常に潜んでいるのである。いやそれどころか、劇前半において、Beatrice に頻繁に投げかけられる次のような揶揄の言葉さえ、無垢な女性を「汚れた売春婦」("a contaminated stale" 2.2.25) として有徴化していく中傷に、いともたやすく変化していく可能性をはらんでいるのである。

LEONATO. By my troth, niece, thou wilt never get thee a
husband, if thou be so shrewd of thy tongue.

ANTONIO. In faith, she's too curst. (2.1.16-18)

BENEDICK. She speaks poniards, and every
word stabs: if her breath were as terrible as her
terminations, there were no living near her, she
would infect to the North Star. (2.1.231-34)

Lynda E. Boose や Susan D. Amussen が明らかにしたように、女性の身体と社会共同体を相
同的關係でとらえていた近代初期英国においては、「男まさりの女」(a scolding woman) の提
喩である「口」と、「売春婦」(a whore, 'quean') の提喩である「性器」には、閉じられた共同
体社会が外部に対して抱く不安が転置されやすいがゆえに、「男まさりの女」は「売春婦」と同
じ社会的位相に位置している、としばしば考えられていたからである (Boose 255; Amussen
103)。Martin Ingram は、当時の英国社会の特徴のひとつが「性的評判をめぐる独得なうわさ
話」であったと指摘しているが (305)、同様の特徴を備えた *Ado* においては、「男まさりの女」
と呼ばれる Beatrice の社会的立場と、中傷された Hero が置かれるそれとの差が、ほとんどな
くなってしまふ危険性さえあったのである。

これまで論じてきたことを念頭に置くならば、*Much Ado about Nothing* という本劇のタイ
トルはまことに示唆に富んでいると言わざるをえない。それは「つまらないこと (nothing) に
ついての騒動」を明示すると同時に、「眼差し (noting) をめぐる騒動」がいかに容易に「邪視=
中傷をめぐる騒動」に変容するか、をも暗示しているからである。

III

バシリスクの眼にも似た Borachio や Don John の眼から放たれるよこしまな眼差しに対抗す
るために、Messina の共同体はひとつの儀礼を案出する。五幕三場、教会あるいは Leonato 家
の靈廟で、Claudio によって執行される改悛の儀礼である。彼は Don Pedro、Balthasar、そし
て楽師たちとともに蠟燭を持って登場し、碑文——“Done to death by slanderous tongues /
Was the Hero that here lies: ... So the life that died with shame / Lives in death with
glorious fame” (5.3.3-4, 7-8) ——が記された紙を Hero の墓前に捧げる……。

この改悛の儀礼がとりわけ印象的なのは、近代初期英国における教会裁判所 (the church
courts) が、中傷をめぐる裁判で有罪の判決を受けた者に課した、悔い改めの儀礼 (penance)
にきわめて類似している点である。

[William Smithe] shall ... at the time of divine service come into the said
parish church and there being shall have a white rod of an ell long in his
right hand standing under the pulpit converting his face unto the people in
the body of the church, being bareheaded, and so standing until divine
service be ended shall immediately before the departure of the people then

congregated together come to the pew or seat where the said [Helen] Broune shall sit, and kneeling upon his knees shall ask her forgiveness in that he hath slandered her, and also desire the people to forgive him for the offence committed unto them and desire them to take example by him to avoid and eschew the like. (qtd. in Ingram 294)

Hack has [this day] to answer the libel. On which day Hack alleged that the said Alice Haydon, being lawfully cited, appeared and confessed judicially that by the account of others she uttered defamatory words against the mother of Eleanor Hall, upon which admission she submitted herself to judgment of the law. Thereupon his lordship saw fit to deliberate in this cause until the next [court].

On which day the said Alice Haydon appeared in person and submitted to the mandate of the judge. Upon her so submitting, his lordship enjoined public penance to be carried out in her parish church the Sunday following, to wit, dressed in a linen sheet, with bare feet and legs and carrying a lighted wax candle in one hand and a rosary in the other, she should go before the procession in penitential fashion, and at the time of the offertory of the mass should declare to the people the reason for her penance, and that she has [a day] to make certification in the next. (Helmholz 25-26)

前者の引用は、Wiltshire Record Officeに残された1566年の判決記録の一部。有罪を宣告されたWilliam Smitheが教区教会で行う儀礼について、45インチの杖の持ち方から、原告Helen Brouneと会衆への謝罪の仕方に至るまで、事細かに指示されている。後者の引用は、1556年、Salisburyの教区法院(Consistory Court)において記された判決記録の一部。やはり中傷をめぐる裁判で有罪の判決を受けたAlice Haydonが、教区教会で行わなければならない悔い改めの儀礼——亜麻布の衣を纏うこと、片方の手で蠟燭を、もう一方の手でロザリオを下げ、裸足のまま悔い改めの儀礼を行う理由を会衆に告げること——が克明に記録されている。Ado五幕三場に描かれた改悛の儀礼は、当時の教区教会における、こうした悔い改めの儀礼のパラダイムに基づいて行われるのである。

近代初期英国における中傷事件に関する裁判記録とインターテクスチュアルな関係を結んでいるのは、Claudioの改悛の儀礼だけではない。Don PedroとBenedickの次のやりとりからさえ、教会裁判所で証言台に立った当時の証人の声を聞くことができるのである。

DON PEDRO. Well, as time shall try. 'In time the savage
bull doth bear the yoke.'

BENEDICK. The savage bull may; but if ever the sensible
 Benedick bear it, pluck off the bull's horns and set
 them in my forehead, and let me be vilely painted,
 and in such great letters as they write, 'Here is good
 horse to hire,' let them signify under my sign, 'Here
 you may see Benedick, the married man. (1.1.241-48)

ここで用いられている角のイメージに、「寝取られ男」(cuckold)の象徴だけでなく、結婚することによって活力と男らしさを失い、「去勢」(emasculation)されていく男性から奪われる、ファロスの意味を読み込んでいるのは Carol Cook であるが(78-79)、次の証言録取書(deposition)からも明らかのように、「寝取られ男」を表す角は、しばしば中傷事件を引き起こすきっかけでもあったのである。

West Ham, Essex, 1589. *Against John Hopkinson. Hopkinson appeared and said* that he with others were in the companie of a stranger, in the house of John Ward of Westham, a vittelinge house, in the night time; and talking of Mr Eborne, some said that he was jealious over his wyf; the said stranger said yf he knewe where he dwelt, he would naile a paire of hornes at his doore; and in further talke this examinant said, that Robert Dickins wold geve him a paire of hornes, and so did, & he nailed them at the said Mr Eborns dore. (Hair 137-38)

Messinaの共同体構成員の面前で“an approved wanton”(4.1.44)とか“a common stale”(4.1.65)と、ClaudioたちからHeroが辱めを受ける場面において、彼女が身の潔白を声高に主張しないで、意外なほど寡黙であることも、中傷事件に巻き込まれた、当時の女性の置かれた状況を正確に映し出していると言えよう。歴史家 Laura Gowing が論じているように、非の打ち所がないほど貞潔で、名誉を重んじる女性は当時、法廷において自分の性的評判を声高に論ずるべきではないという暗黙の了解があったからである。不貞という汚名をすすぐために自己弁護を行えば、それだけ彼女が語る言葉は性に関する言説を再生産し、永続化させることになり、逆説的に彼女の抗弁が不名誉=不貞と結びついてしまうという事情があったからである(“Language” 40)。いやそれどころか、次に引用する *A Plaine Description of the Auncient Petigree of Dame Slaunder* (1573) の一節が明らかにするように、そもそも近代初期英国においては、中傷とは被害者の抗弁する機会が奪われた「喜劇」(“Comedies”)としてとらえられていたのである——³⁾

Sclaunder is an accusation made for hatred, vnknowen to him that is accused, wherein the accuser is beléeued, and hee that is accused is not called to giue answer, or to denye any thing, and this definition standeth

on thrée persons, euen like as matters of Comedies doe that is, by the Accuser, and by him that is accused, and by the hearer of the accusation.
(B7*)

したがって Hero の寡黙は、当時の女性に課せられた、裁きの場における二重の沈黙を意味しているのである。

中傷という穢れを祓うための、Claudio の改悛の儀礼は、*Ado* のテキストに重ね焼きされた、当時の中傷事件の諸相を前景化し、それらを収斂させていく焦点として機能しているのである。

IV

確かに五幕三場の改悛の儀礼を通して、Claudio は悔い改め、Hero にとっての恥辱は名声へと、彼女の死は再生へと変貌する。しかし、Borachio たちの邪視とは別のレベルで劇世界に偏在し、「うわさ」、「世評」、「眼差しを向ける行為」から中傷を生成していく力——Enid Welsford の言葉を借りるなら、「得体の知れない、宇宙の嫉妬心 (“queer, cosmic jealousy” 66) ——を、Claudio の改悛の儀礼は祓うことができるのだろうか。Shakespeare はどうやら、改悛の儀礼を補完する形で、そうした嫉妬心を逸らせ、舞台世界を守護する仕掛けを劇中に施しているようである。それが、Dogberry の存在であり、彼の呪術的な言葉 “But masters, remember that I am an / ass” なのである。

Plutarch は上に挙げたエッセイの中で、邪視から身を守るために「汚らしくて馬鹿げたもの」 (“some filthie and absurd object” 724) を御守りとして身につける習慣に言及している。そうした呪符は、標的となった人物から邪視を逸らせ、自分の方によこしまな視線を引きつける、というわけである。Tobin Siebers が指摘するように、御守り(呪符)を表す “amulet” が、「戸惑わせる」を意味するラテン語の *amolior* に由来するならば (7)、Plutarch が述べる「汚らしくて馬鹿げたもの」、古来から邪視除けとされた、親指を人差し指と中指の間から突き出す、性的意味をもったジェスチャー、賛美の対象となった者に唾をかけること、グロテスクな仮面、あるいは愚者の披露する道化た振る舞い・言葉などは、邪視を「戸惑わせる」には有効な手段と言えるだろう (Elworthy 115-57, 420; Siebers 7-11, 58)。その意味で、malapropism に代表される Dogberry の愚かしい言葉遣いはそれだけで、「得体の知れない、宇宙の嫉妬心」を戸惑わせ、劇世界をそうした力から守る働きをしていることは確かである。

Bacon は邪視除けのメカニズムをこう説明している——

... the Act of *Envy*, had somewhat in it, of *Witchcraft*; so there is no other Cure of *Envy*, but the cure of *Witchcraft*: And that is, to remove the *Lot* (as they call it) and to lay it upon another. For which purpose, the wiser Sort of great Persons, bring in ever upon the Stage, some Body, upon

whom to derive the *Envie*, that would come upon themselves... (30)

引用した部分の冒頭で、「ウィッチクラフト」には「ウィッチクラフト」で対処すること、つまり、邪視除けとして一番有効なのは類似療法 (homeopathy) であると述べている点に注意したい。人を石と化してしまう邪視を具えた Medusa の仮面を、邪視除けに用いるときに働く原理である (Siebers 8)。Woodbridge は、この邪視除けに働く類似療法の原理がはっきりと表現されているのは、Petrarch の恋愛詩においてであると説く。「アイテム化されたブレイゾン」を含む Laura の描写が、Medusa さながらの彼女の眼差しを防ぐ呪符の役割を果たしているというわけである——

And we might well think of the poetry itself as protection against the mistress's baleful eye. A sonnet sequence's series of pictures of the lady, including the itemized blazon, turned a mirror on her, reflecting her gaze back on herself as did evil-eye amulets. (221)

そして「邪視除け」(evil-eye amulets) という点では、本論文の冒頭に掲げた Dogberry の言葉——“But masters, remember that I am an / ass”、“yet forget not / that I am an ass” (4.2.73-75) ——もまた、Messina に偏在する「宇宙の嫉妬心」を逸らせ、無効化する邪視除けと同じ役割を果たしていると言えるのではなからうか。なるほど、Dogberry は Laura のような危険な眼差しの持ち主でもない。それどころか、上に引用した言葉の直後に語られる彼の次の台詞には、笑いだけではなく、ひとつ間違えば嫉妬をも招来しかねない意味内容が含まれていることもまた確かである。

I am a wise fellow, and which is more, an officer,
and which is more, a householder, and which is
more, as pretty a piece of flesh as any is in Messina,
and one that knows the law, go to, and a rich
fellow enough... (4.2.77-81)

しかしそれにもかかわらず、伝統的な邪視除けの手段として、称賛を浴びた子供をわざと非難してみたり、邪視除けのスケープゴートとしての愚者が、王などの権威者の高慢を戒めるために大声でののしり、侮蔑的な言葉で邪視を無効化することが試みられてきたことをここで想起するならば (McCartney 9-23; Welsford 66-67)、Dogberry が“ass”という侮蔑の言葉をくりかえし自分の身に纏わせる「愚行」は、本劇に蔓延している邪視・中傷を笑い飛ばし、舞台からそれらを浄化していく役割を担わせられた——類似療法とは別の原理に基づく——邪視除けのジェスチャーと解することも可能なのである。

さらに、Dogberry の“remember that I am an / ass”が嫉妬＝邪視を逸らし、無効化する働きをしているのと同様に、劇の大団円における、Benedick による「角」への言及も、「得体の知れない、宇宙の嫉妬心」を無効にする力を持っていると言えるのではないだろうか。

BENEDICK. Therefore play, music. Prince,
 thou art sad; get thee a wife, get thee a wife! There
 is no staff more reverend than one tipped with horn. (5.4.120-22)

Benedick は、結婚相手が将来不貞を働くことを憂えているわけではない。かつて「君主の道化」("the Prince's jester" 2.1.127) と、Beatrice に中傷されていた Benedick が、結婚を決意するにあたり、「寝取られ男」あるいは「去勢された男」という、近代初期英国の男性にとってまことに不名誉な称号を自ら引き受けることによって、“remember that I am an / ass” と高らかに宣言する Dogberry と同じ身振りをしている点こそ肝心なのである。古くから月の形をした御守りは、妊婦を守護する月の女神 Diana との関連から、邪視除けに用いられてきたのであるが (Elworthy 187-94)、本劇の結末で語られる「角」も、Bacon が「歩きまわる情念」と呼んだ「宇宙の嫉妬心」を劇世界から偏向させ、無効化する働きをしているのである。

注

* 本稿は、日本英文学会第 69 回全国大会 (1997 年 5 月 25 日、於 宮城学院女子大学) における口頭発表の原稿を大幅に加筆・修正したものである。

- 1) *Ado* からの引用はすべて、The Arden Shakespeare のテキストによる。
- 2) 本劇における「うわさ」、「世評」の重要性に関しては、Cerasano 175 を参照。
- 3) 近代初期英国における中傷の概念と演劇との関連性については、Habermann 1-3 および Gowing, *Domestic* 119-25 を参照。

引用文献

- Amussen, Susan Dwyer. *An Ordered Society: Gender and Class in Early Modern England*. Oxford: Blackwell, 1988.
- Bacon, Francis. "Of Envy." *The Essayes or Counsels, Civill and Morall*. Ed. Michael Kiernan. Oxford: Clarendon, 1985. 27-31.
- Boose, Lynda E. "Scolding Brides and Bridling Scolds: Taming the Woman's Unruly Member." *Shakespeare Quarterly* 42(1991): 179-213. Rpt. in *Materialist Shakespeare: A History*. Ed. Ivo Kamps. London: Verso, 1995. 239-79.
- Cerasano, S. P. "'Half a Dozen Dangerous Words'." *Gloriana's Face: Women, Public and Private, in the English Renaissance*. Hemel Hempstead: Harvester Wheatsheaf, 1992. 167-83.
- Cook, Carol. "'The Sign and Semblance of Her Honor': Reading Gender Difference in *Much Ado about Nothing*." *PMLA* 101(1986): 186-202. Rpt. in *Shakespeare and Gender: A History*. Ed. Deborah E. Barker and Ivo Kamps. London: Verso, 1995. 75-103.
- Dundes, Alan. "Wet and Dry, the Evil Eye: An Essay in Indo-European and Semitic Worldview." *The Evil Eye: A Casebook*. Ed. Alan Dundes. 1981. Madison: U of Wisconsin P, 1992. 257-312.
- Elworthy, Frederick Thomas. *The Evil Eye: The Origins and Practices of Superstition*. 1895. New York: Julian, 1958.
- Gowing, Laura. *Domestic Dangers: Women, Words, and Sex in Early Modern London*. Oxford Studies in Social History. Oxford: Clarendon, 1996.
- . "Language, Power and the Law: Women's Slander Litigation in Early Modern London." *Women, Crime and the Courts in Early Modern England*. Ed. Jenny Kermode and Garthine

- Walker. London: UCL P, 1994. 26-47.
- Habermann, Ina. *Staging Slander and Gender in Early Modern England*. Women and Gender in the Early Modern World. Hants: Ashgate, 2003.
- Hair, Paul, ed. *Before the Bawdy Court: Selections from Church Court and Other Records Relating to the Correction of Moral Offences in England, Scotland and New England, 1300-1800*. London: Elek, 1972.
- Helmholz, R. H., ed. *Select Cases on Defamation to 1600*. London: Selden Society, 1985.
- Howard, Jean E. "Renaissance Antitheatricality and the Politics of Gender and Rank in *Much Ado About Nothing*." *Shakespeare Reproduced: The Text in History and Ideology*. Ed. Jean E. Howard and Marion F. O'Connor. New York: Routledge, 1987. 163-87.
- Ingram, Martin. *Church Courts, Sex and Marriage in England, 1570-1640*. Past and Present Publications. Cambridge: Cambridge UP, 1987.
- James I. *Daemonologie*. 1597. The English Experience 94. New York: Da Capo, 1969.
- Krieger, Elliot. "Social Relations and the Social Order in *Much Ado about Nothing*." *Shakespeare Survey* 32 (1979): 49-61.
- McCartney, Eugene S. "Praise and Dispraise in Folklore." *Papers of the Michigan Academy of Science, Arts and Letters* 28(1943): 567-93. Rpt. in *The Evil Eye: A Casebook*. Ed. Alan Dundes. 1981. Madison: U of Wisconsin P, 1992. 9-38.
- A Plaine Description of the Auncient Petigree of Dame Slaunder*. London, 1573. STC 22630.
- Plutarch. *The Philosophie, Commonlie Called, the Morals*. Trans. Philemon Holland. London, 1603. STC 20063.
- Shakespeare, William. *King Richard III*. Ed. Antony Hammond. The Arden Shakespeare. London: Methuen, 1981.
- . *Much Ado about Nothing*. Ed. A. R. Humphreys. The Arden Shakespeare. London: Methuen, 1981.
- . *Othello*. Ed. E. A. J. Honigmann. 3rd ed. The Arden Shakespeare. Walton-on Thames: Nelson, 1997.
- . *Lucrece. The Poems*. Ed. F. T. Prince. The Arden Shakespeare. London: Methuen, 1960.
- Siebers, Tobin. *The Mirror of Medusa*. Berkeley: U of California P, 1983.
- Welsford, Enid. *The Fool: His Social and Literary History*. 1935. New York: Doubleday, 1961.
- Whitney, Geoffrey. *A Choice of Emblemes and Other Devises*. 1586. The English Experience 161. New York: Da Capo, 1969.
- Woodbridge, Linda. *The Scythe of Saturn: Shakespeare and Magical Thinking*. Urbana: U of Illinois P, 1994.

Synopsis

"But Masters, Remember That I Am an Ass" : The Evil Eye and Slanders
in *Much Ado about Nothing*

By Mutsumu Takikawa

The aim of this paper is to analyse the magical effect enshrined in Dogberry's words "remember that I am an / ass" (4.2.73-74) from the anthropological and historical viewpoint by focusing upon the interrelationship between the evil eye belief and the idea of slander in early modern England.

In this play, to "note" (1.1.150), to stare, and to gaze at someone tend to be transformed into slanderous acts which "affix to (one) the stigma or accusation of some fault" (*OED* "note" *v.*², 7.a). And indeed, the "queer, cosmic jealousy" (Welsford 66), alias the evil eye, empoisons Claudio who does "note" Hero and thereby drives her into supposed death by means of slander.

The features of slanders depicted in *Much Ado about Nothing* are as follows: First, they are contagious, and moreover, there are strong likelihood that the instances of "hearsay" (3.1.23) and "report" (3.1.97) may turn into slanders; Secondly, the slanders represented in this play have intertextual relations with the actual defamation cases recorded in the church courts in early modern England.

This analysis of the magical belief in the evil eye and the idea of slander in *Much Ado about Nothing* leads to the conclusion that Dogberry the fool plays the part of mascot as well as scapegoat, upon whom the evil eye/slander is inflicted, and that his incantational phrase "remember that I am an / ass" functions as a form of amulet which deflects and neutralizes the influence of slanders/evil eye.